

1 目的

安全ながん薬物療法の実施にあたり、保険薬局では、医療機関と密接な連携を保ちつつレジメンの理解と処方薬調製、服薬指導、テレフォンフォローアップ (TF) 計画の策定と実施等を担い、次回治療に向けてのフォローを切れ目なく行うことが求められる。その中で、保険薬局から病院へのフィードバックツールとして、トレーシングレポート (TR) の果たす役割が大きい。本研究では、薬局機能として TR ががん薬物療法適正化に及ぼす影響、TF 時の聴取項目と有害事象の関連性、及び医療機関薬剤師との連携効果について、数値化による検証を行い有用性の評価を試みた。

2 方法

2022年2月1日～4月29日の調査期間内に、外来がん薬物療法実施後に初回 TF を実施した当薬局利用者 95 名を対象に、TR 記載内容および薬剤服用歴管理記録の内容、以降の治療状況等を原資料に、次の 3 項目を評価項目として統計学的解析を行った。統計解析ソフトは、IBM SPSS Statistics 28 (日本 IBM) を用い、各検定における有意水準は 5%未満とした。

- (1) 外来がん薬物治療患者の TR おける治療方向性一致の検証：TR の記載内容により、対象患者を「経過報告のみ」、「処方の追加・変更の提案あり」の 2 群に分け、両群の次回治療における処方変更の有無を調査し、薬局薬剤師による評価と主治医の判断とが一致した割合 (治療協調率) を算出し、さらにカイ 2 乗検定と残渣分析により、両者の治療方向性が一致しているか否かを検証した。
- (2) TF の際の有害事象の聴取項目数と高 Grade 事象把握との関連性の検証：TF の際に把握した有害事象の最高 Grade により、対象患者を「なし」、「G1」、「G2」の 3 群に分け、クラスカル・ウォリスの検定により各群の聴取項目数に差があるか否かを統計解析した。
- (3) 薬局連携により得られるがん薬物療法適正化への貢献度の検証：説明変数として「薬局薬剤師の処方提案の有無」、「病院薬剤師からの事前情報共有シートの有無」、比較対象に「併存症の有無」、「複数医療機関受診の有無」を採用し、「期間中に生じた体調変化に起因する次回治療変更の有無」を目的変数としロジスティック回帰分析を実施した。

3 結果と考察

方法(1)より、「経過報告」群では 66 件中 15 件、「処方提案」群では 29 件中 17 件で次回治療における処方変更が確認された。全 95 件中 68 件で評価が一致したこととなり、治療協調率は 72%と算出された。カイ 2 乗検定の結果、有意な差が得られ ($\chi^2(1) = 11.62, p < .001$)、「処方変更あり」は「処方提案」に、「処方変更なし」は「経過報告」に有意に関係することが示された。本結果から、TF の際の薬学的評価は概ね適切であり、連携体制の中で薬局薬剤師の存在感を示すことができたと考えられる。一方で、評価に乖離を生じたケースからも目を背けてはならず、これまで以上に治療方針の理解に努め、適切な薬学的評価に必要な知識やスキルを習得する必要がある。

方法(2)より、有害事象の聴取項目数は、全体平均 5.18 ± 2.22 に対し、「なし」群では 4.57 ± 1.98 、「G1」群では 5.39 ± 2.18 、「G2」群では 6.60 ± 2.41 となり、クラスカル・ウォリス検定の結果、検定統計量 8.05, $p < .018$ で有意な差が認められた。また、各群間の比較では、「なし」群と「G2」群との間に有意な差が認められた。本結果から、TF の際の聴取項目数が多い患者ほど高 Grade の有害事象を把握できており、近年クローズアップされている irAE 等について、TF の際の聴取項目数を増やすことにより早期発見や主治医への引継ぎ等の適切な対処に繋がる可能性がある。一方で、聴取項目数が増えると必然的に TF に要する時間が延長し、患者の体力的負担や、薬局薬剤師の業務圧迫が懸念されるため、適切なバランスを見出すことが課題となる。

方法(3)より、TR を送付した 95 件中、「薬局薬剤師の処方提案」は 30 件で実施されていた。ロジスティック回帰分析の結果、4 項目の説明変数のうち、「薬局薬剤師の処方提案」(OR: 8.121; 95%CI: 2.734 - 23.956) および、「病院薬剤師からの事前情報共有シート」(OR: 3.456; 95%CI: 1.170 - 10.204) について、有意な差により「体調変化に起因する次回治療変更」に正の影響を与えることが示された。本結果から、薬局薬剤師が TF の際に患者に生じている体調変化を逃さず捉え、処方提案として TR に反映させた場合に、次回以降のがん薬物療法の適正化に貢献できていると考えられる。また、医療機関薬剤師からの事前情報提供は、薬局薬剤師が TF 実施に際し必要とする患者背景の把握やレジメン理解の一助となり、両者が良好なシナジーを形成していることが示唆された。

4 結論

本研究では、保険薬局における外来がん薬物療法施行患者への TF と TR、ならびに薬局連携の有用性について、当薬局での事例を数値化により検証した結果、いずれも有用であるとの結論を得た。